

概要

- 亜熱帯性気候に属する奄美大島は、中晩性柑橘のタンカンで全国一の生産を誇るが、従事者の多くが技術習得の未熟な多様な零細農家で、産地の維持・発展のためには、**各々の力量アップと意識覚醒が課題**。
- このため農政普及課では、**基礎的な講座やガイドブックの発刊、SNS上での技術解説や情報発信等に加え、新規就農者の弱点を補う『低樹高計画密植栽培仕様』の園地導入**による産地構造的な改革を推進。
- その結果、**柑橘全体の栽培面積・生産量が5年間で概ね10%アップ**するとともに、**認定新規就農者等の新たな人材を7年間で17名確保**するなど、産地の生産基盤強化と将来の主力となる農家の育成に成功。

具体的な成果

1 産地規模の拡大

- 柑橘栽培面積が拡大するとともに、生産量が増大（H29→R4）

- ①栽培面積 **250ha → 288ha (+15%)**
- ②生産量 **1,099t → 1,224t (+11%)**

2 新規就農者の定着・確保

- 新規就農者の高い定着率を維持（H23→R元）

94.6%

- 新規就農者の成長度の到達（H28→R5）

認定新規就農者11名

認定農業者3名

1ha規模到達者3名 計17名

3 低樹高計画密植仕様の導入拡大・早期多収実現

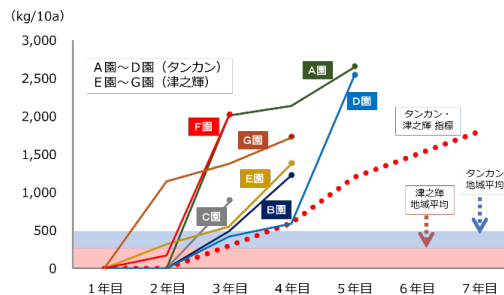
- 低樹高計画密植仕様園地導入農家数（H28→R4）

0戸 → 28戸

- 地域平均単収までの到達期間の短縮

植栽後2年～4年

区 分	栽培面積			生産量		
	H29	R4	R4/H29	H29	R4	R4/H29
タンカン	240.5 ha	266.0 ha	111 %	1,093 t	1,189 t	109 %
垂水1号	240.5 ha	260.1 ha	108 %	1,093 t	1,189 t	109 %
平井Red	****	5.9 ha	****	****	****	****
津之輝	9.3 ha	22.3 ha	240 %	6 t	35 t	583 %
計	249.8 ha	288.3 ha	115 %	1,099 t	1,224 t	111 %



普及指導員の活動

平成28年度～

- 奄美大島南部に新規就農者らを含む『**かんきつ研究会**』を設置し、これを起点に、**現地学習会や先進地事例調査等を実施**して、生産農家の意識改革と資質向上に注力。
- 新規就農者向けに『**低樹高計画密植仕様**』の作式導入を提案・推進。

令和3年度～

- 兼業・高齢農家等に特化した『**たんかん塾**』の開講や絵本ベースの『**奄美たんかんガイドブック**』の発刊・活用などで、多様な栽培農家のスキルアップに貢献。
- コロナ禍でも学びを止めない工夫として、**SNS (Instagram・Facebook)** での投稿やオンライン学習会の開催を追求。

令和5年度～

- 県内の**タンカン産地間の交流活動**や**ドローンを使った防除技術プロジェクト**など新たな視点での取組を始動。

普及指導員だからできたこと

- ・ 俯瞰的視点で地域を捉え、納得性のあるエビデンスをもって問題解決のために最善の方針を提起することができた普及指導員だからこそ、人の心を動かし、大きな変革へと地域を導くことが可能。
- ・ 農家のリーダーである指導農業士、市町村、JA、試験研究機関の絶対的信頼を獲得して、地域全体の雰囲気を鼓舞し、取組の企画・立案から調整まで全体をコントロールした中で一連の取組を進めることができた。

奄美大島の多様な人材を生かしたタンカン産地のアップデート

活動期間 平成 28 年度～（継続中）

1. 取組の背景

鹿児島県本土と沖縄本島のほぼ中央に位置する奄美大島では、平地の少ない急峻な地形や亜熱帯性の温暖な気候条件のもと、果樹を主産とする農業が展開され、農業産出額の 1/4 を占めている。なかでも、中晩性柑橘のタンカンは平成 28 年当時で栽培面積 240ha、生産量 1,000 t を誇る全国一の産地である。近年は奄美地域の環境に適した同じ中晩性柑橘の津之輝の品質の高さも注目され、タンカン農家による導入が進みつつある。タンカンの生産農家数は 700 戸と極めて多いが、その構成分布をみると、将来に向けての産地の維持・発展という点で大きな不安を抱えていた。これまで大規模経営の担い手農家を重点とした産地育成が図られてきた経緯があるが、タンカン生産者の実に 9 割以上は新規就農者や高齢・兼業農家といった階層の方々であり、その生産意欲や潜在能力を引き出す取組が不足していた。そこで、20 年後の柑橘倍増 2,000 t 規模の産地づくりを最終目標に、技術の習熟度に配慮した学習プログラムの実行や新規就農者仕様の作式導入に努めることで、5 年後の産地全体の生産力 10% 向上実現と将来の担い手である新規就農者の育成強化を図ることをめざした（図 1）。なお、関係者の協力体制や役割分担を明確にしたうえで、普及が一連の取組を主導して活動展開を図ることにした。

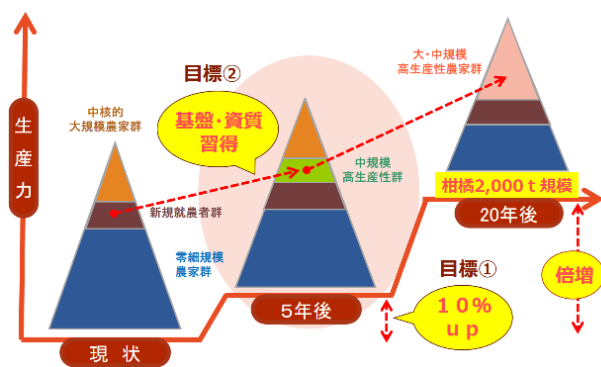


図 1：取組目標のイメージ

2. 活動内容（詳細）

（1）産地全体の生産力向上

新規就農者や零細農家等を対象に『たんかん塾』を開催して、基礎生理のメカニズムと管理技術の意義や考え方についての入念な理解促進を図った。また、初心者理解の妨げとなる専門用語を排除したオリジナルガイドブック（写真 1）や適正な着果管理を促すための奄美版専用摘果ノギスを供与して、これまで産地に眠っていた潜在能力を引き出す工夫を試みた。



写真 1：奄美たんかんガイドブック

（２）新規就農者の資質向上及び生産基盤の強化

体系的な育成プログラムをもとに活動を展開した。最初の活動母体として新たに研究会を発足し、現地での実践型の研修や先進地への訪問調査を重ねた。また、民間講師や他産地の一流柑橘農家、地域の既存組織との接点を強める機会も交えながら、経営の考え方やリーダー論についての見識を深めることにも心を砕いた（写真２）。コロナ禍に直面した際は、学びの機会を失することがないように、ミーティングアプリやSNS（Facebook・Instagram）という新たなツールを活用した技術解説や情報発信を続けながら、士気高揚に努めた。奄美大島の新規就農に多いI・Jターン者に共通する経営基盤の脆弱性を考慮して、早期に収益を上げることを優先した『低樹高計画密植栽培仕様（図２）』を推奨し、指導農業士にもその有用性について粘り強く理解を求めた上で、普及を図った。さらに、新規就農者の経営安定の実現性を一層高めるために、荒廃農地の再生や後継者不在農家が所有する既存樹園地の流動化にも支援の手を伸ばした。



写真2 熊本県柑橘生産農家グループ
との奄美での産地間交流

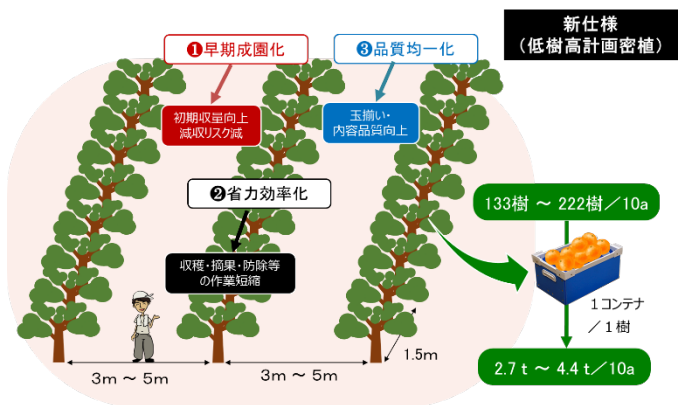


図2 新規就農者向けに考案した低樹高計画密植栽培仕様のイメージ図

3. 具体的な成果（詳細）

（１）産地全体の生産性向上

一連の取組の結果、産地全体の柑橘の生産性向上への意識が大きく変化した。奄美大島の柑橘生産の近年の伸びは、新植・改植面積が県内産地のトップに躍り出るほどに勢いを増し、栽培面積・生産量ともに、この5カ年で目標とする10%アップを概ね実現できた（表1）。また新規就農者向けに提案した低樹高計画密植栽培仕様の植栽園地が次々に誕生し、これらの園地では主力柑橘であるタンカン・津之輝それぞれの地域平均や指標をはるかに上回る水準の単収を記録した（図3）。当初、この栽培仕様に関して懐疑的に見ていた大規模農家の中にも次第に理解者が現れ、現在、大規模農家も含めた30名近くの生産者が新たにこの栽培方式を導入するに至った。このような雰囲気と呼応するように、指導農業士をはじめとする応援者も奮起し、遊休農地や耕作放棄の恐れのある既存園地の流動化支援の動きも加速している。

(2) 新規就農者のステップアップ

新規就農者自らが技術を進化させるほどの改善意欲を発揮し、経営の持続性への手応えを感じるなどの意識変化が表れ始めた。経営に柑橘を位置づける認定新規就農者やさらに認定農業者へとステップアップする者も誕生してきた。後継者不在の園主から1haを超える単位で新規就農者に経営権が譲られるケースもみられるなど、一定の経営規模を獲得した人材は7年間で17名に達した(表2)。

区 分	栽培面積			生産量		
	H29	R4	R4/H29	H29	R4	R4/H29
タンカン	240.5 ha	266.0 ha	111 %	1,093 t	1,189 t	109 %
垂水1号	240.5 ha	260.1 ha	108 %	1,093 t	1,189 t	109 %
平井Red	****	5.9 ha	****	****	****	****
津之輝	9.3 ha	22.3 ha	240 %	6 t	35 t	583 %
計	249.8 ha	288.3 ha	115 %	1,099 t	1,224 t	111 %

表1 5年間で面積・生産量の推移

認定新規就農者	認定農業者	1ha規模到達者	計
11名	3名	3名	17名

表2 7年間で新規就農からの人材育成

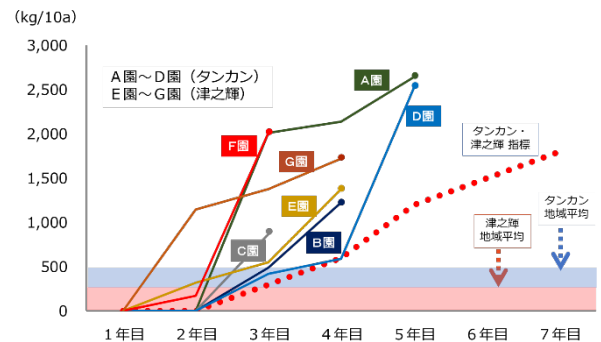


図3 地域指標・平均と導入園地の単収比較

4. 農家等からの評価・コメント

(1) 普及指導協力委員(平井孝宜氏)

自分が就農して19年を数えるが、この間奄美のタンカンの生産性は思うように上がらず、栽培農家の高齢化も進んでいた。その状況を打開する大きなきっかけになったのが、この一連の取組だと思う。密植方式は自分にとっても地域にとっても今後は必須。新規就農者の新しい力が加わり、彼らが台頭してくることで新たな発想や刺激ももらえる好循環が生まれてきていると思う。しかし、奄美のタンカン栽培技術の進化や産地の成長はまだまだ途上にあり、これから。

(2) 大島地区農業青年クラブ員(叶幸治氏)

自分もInstagramを頻繁に使って情報の発信や入手をしている立場として、常に産地の動向や技術に関する実例をアップしている当該アカウント「amami.fruits.banban」の奄美愛に溢れる投稿記事を興味深く見ている。ともに地域の柑橘産業を盛り上げるという視点で情報共有を密にしながら、これからの投稿内容にも注目したい。また、これまで他町で行われてきた『たんかん塾』も、今年は当奄美市での開催が決まり、喜んでいる。時代の流れを見極め、今求められている取組をしっかりと読みとって担ってくれる、そんな今後の普及活動が展開されていくことに大いに期待を寄せたい。

5. 普及指導員のコメント

(鹿児島県大島支庁農政普及課・技術主幹兼係長・松尾至身)

平成 28 年度から足掛け 8 年間、奄美の果樹産業を見つめ、どういう舵取りをし、思いを伝え、どうやったら人の心を動かせるのか、常に自問自答を繰り返しながら一連の取組を進めてきた。とにかく、生産者・関係者の理解があってこそ、幾ばくかの成果が上がったのだと受け止めている。但し、ここまでの取組は序章に過ぎない。次のステージでは、地域の伸びしろをさらに引き出し、より高みをめざして、より高度な取組に挑んでいく。

6. 現状・今後の展開等

(1) 地域の柑橘素材を生かす戦略遂行

従来のタンカン（品種：垂水 1 号）に加えて、奄美でその力が覚醒した『津之輝』や当地の枝変わりで誕生した『平井 R e d』の新植が活発化している。それぞれの特長を生かした産地育成を図りながら、12 月から 3 月までの柑橘リレー出荷体系の確立をめざす。

(2) 次世代の技術開発・普及

新規就農者の育成を現有従事者のリタイア速度が上回る現状において、柑橘産業に従事する人が不足する時代を着実に迎えていく今後の最大の解決テーマは省力化である。柑橘栽培での主要作業となる「①摘果 ②収穫 ③剪定 ④防除 ⑤施肥 ⑥除草」に有効な省力技術を見出し、その活用を果たす。